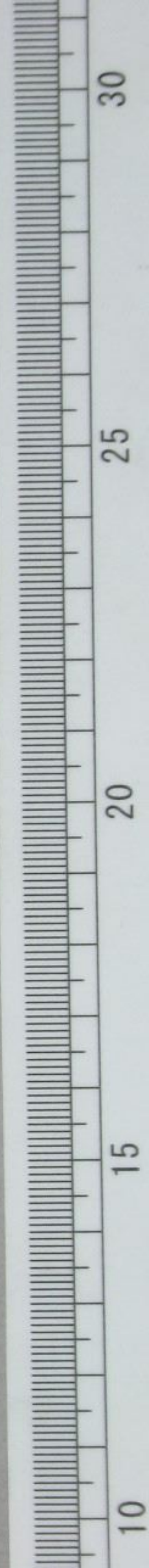




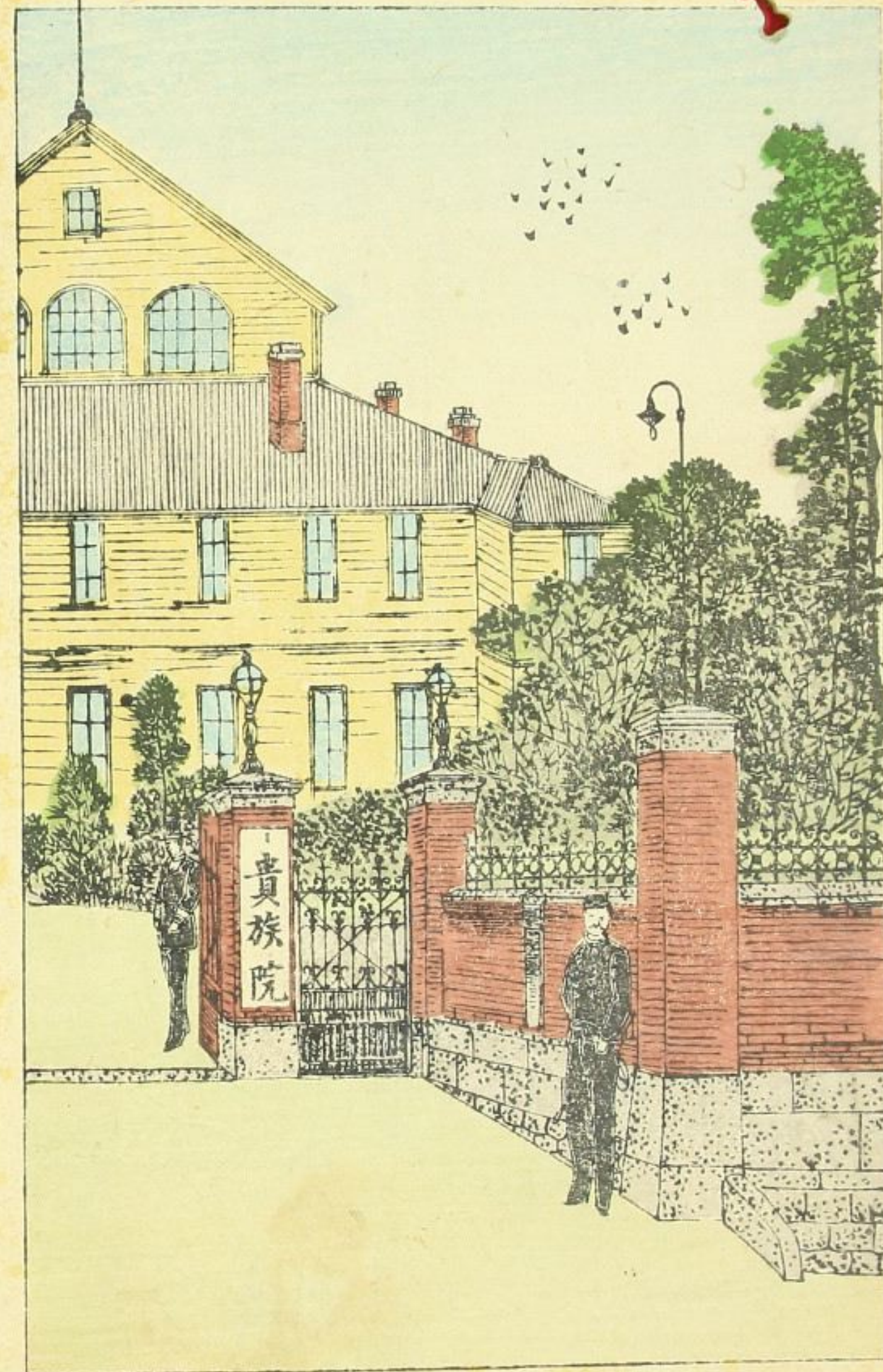
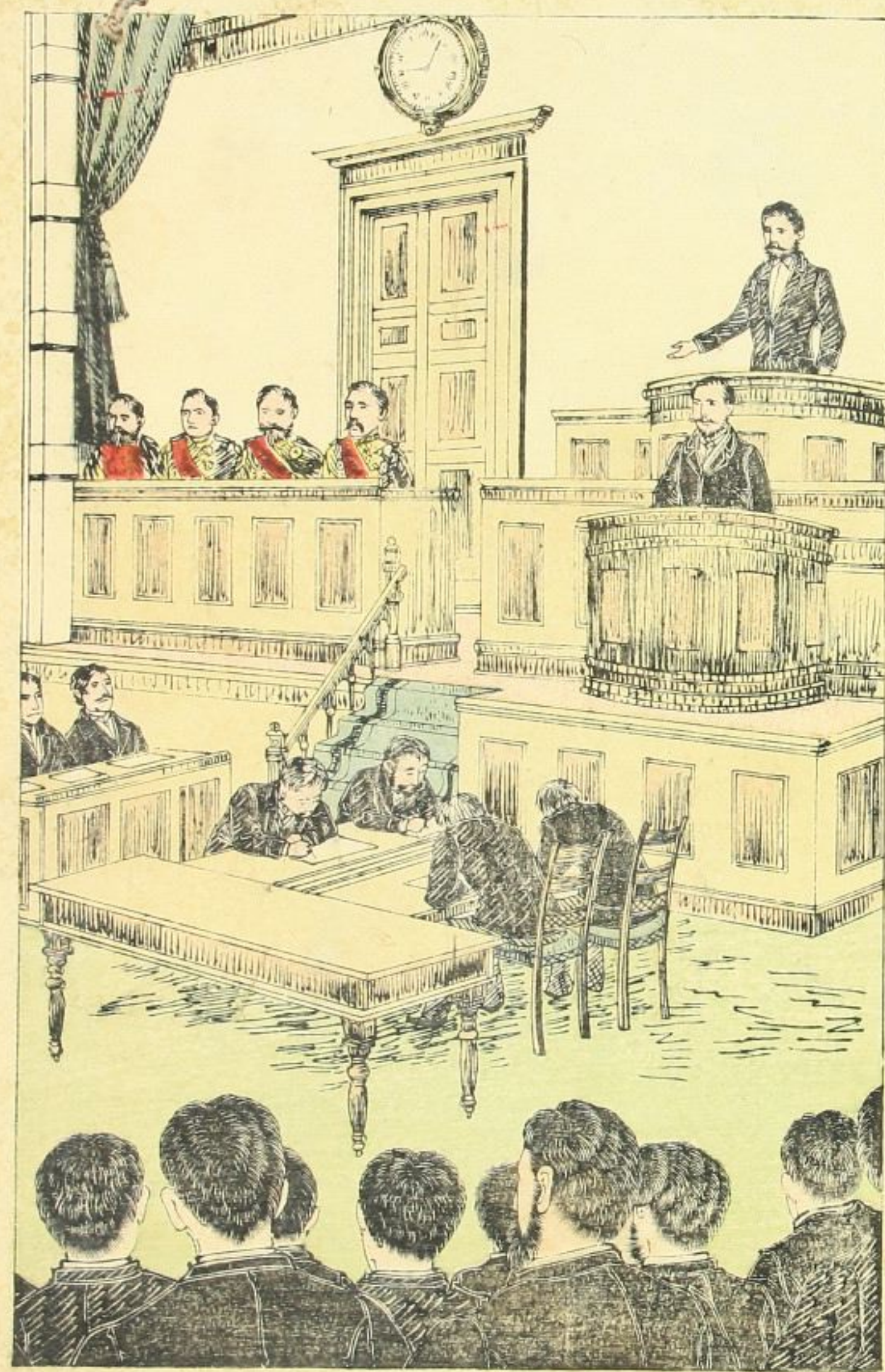
柳田文庫
文庫11
A 100



國會議員而首

[illegible]

擇者



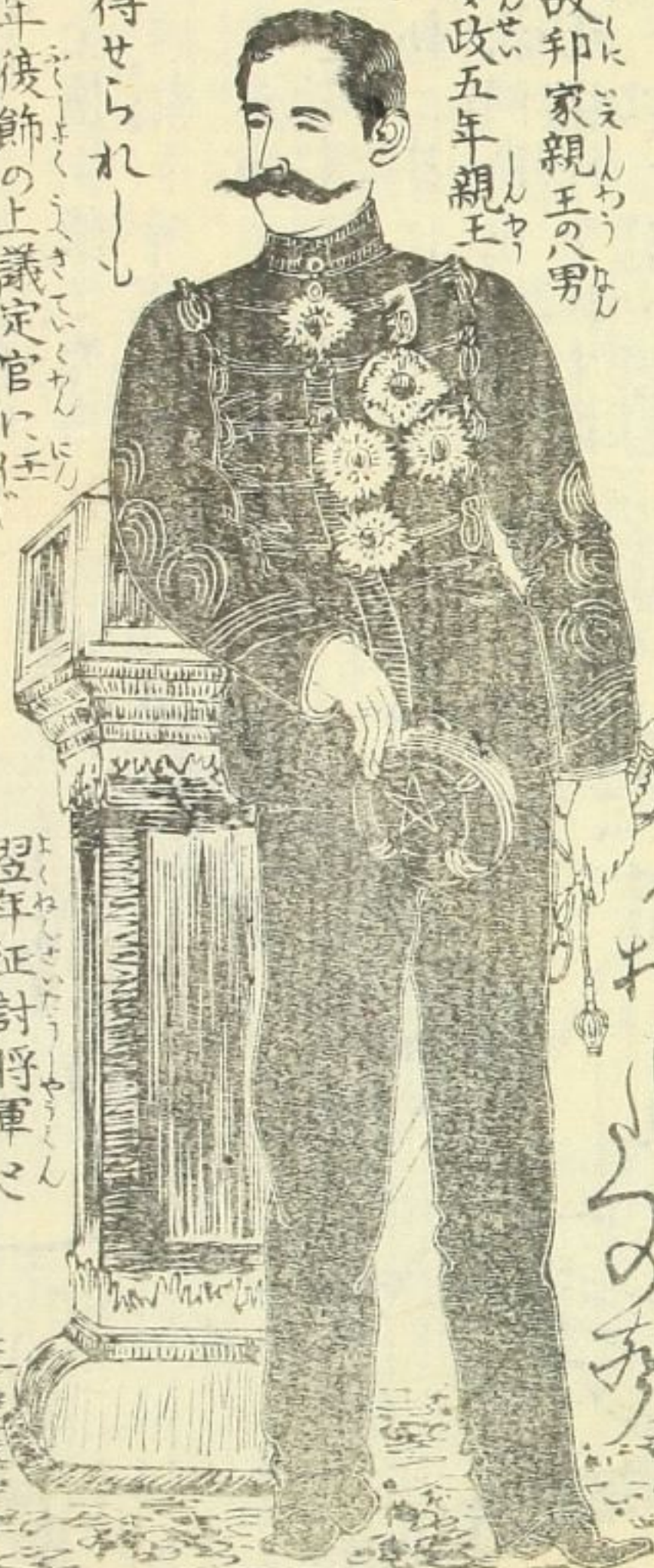
山崎闇斎

有明

都立門外漢也國氏の
こゝろを

國はあまのこゝろを

あ房



大勲位小松彰仁親王朝之新

殿下ハ故邦家親王の八男

にして安政五年親王

宣下次で

仁和寺

御室に

入りて得せられし

慶應三年侯爵の上議定官に任

翌年征討將軍に

なりて朝敵を征伐し鎮定の後ち海陸軍總督に任ト明治三年東伏見宮と

改称せられ陸軍少將に任ト幾もなく中將に進み又小松宮と改称し玉ひ現今

大將に陞り大勲位たり茲に記すハ晴天鶴と云ふ題の歌なり

君ハ作州津山に生る文久二年幕府の命に依り和蘭に留学し明治の初め刑法官判事に任じ同四年特命全權副使となりて清国に赴き帰朝の後ち司法大法官に任ず同九年元老院議員に陞り從三位勲二等に叙せらる夫の拷問廢止の議外人に内地旅行を許す議の如きハ實に君の先見の致す所なり遂に衆議院副議長に撰ばる



從二位 津田道之助

君元土佐の人明治元年召に應じて議政官に出仕し後ち米國に官遊し歸朝して左院議員に任じ又工部文部諸省を歴仕して元老院幹事に進み從三位勲二等に陞り我國諸般の法律編纂君の與からざる者幾んど罕なり亦以て君の伎倆あるを知るに足れり現時貴族院に在てハ副議長を爰に載るハ晴天鶴と云ふ題の歌なり



從三位 細川潤次郎

子ハ舊福井藩士にして
 學問談博詩文を善くす
 慶應の末藩主松平春嶽
 侯を幫けて力を皇室の
 爲り盡し遂に王政復古
 古の大業を樹つ明治四
 年東京府知事に任じ後
 ち元老院議官に陞り次
 て特子爵を授かり華
 族に列す真に子ハ明治
 の元勳と謂ふべきなり
 今茲に載せし一首ハ春
 嶽に寄て懷を述し歌なら
 ん



君ハ旧大村藩士なり風
 に勤王の志深く王政一
 新の事に盡力したる功
 に依り明治の初め新瀉
 縣令に任じ后ち東京府
 知事に轉じ同十一年地
 方官會議の幹事に挙げ
 られ翌年元老院に入り副
 議長の榮職に進み同廿
 二年東京市會議長に撰
 まる現今の位勲ハ後三
 位勲二等たり此下に記
 す和歌ハ松と云ふ題に
 て詠みたるものなり



子ハ舊款藩士資性豪邁に
 して又能く果斷に富む幕
 府の末路尊王の事に奔走し
 明治維新の偉業を翼賛し
 其功を以て陸軍少將に任し
 從四位勲二等叙せられ
 ち中將に進み子爵を授か
 り又元老院議官に任じ樞
 密院顧問官となり其直言
 直論忌まず憚りなく正さ
 唱へ邪を排する鯁骨ハ子の
 特色なり此下に掲るハ
 嘗て羅馬の昔を懷ふて
 詠たる歌なり



君ハ幼少より漢英の二学
 を修め明治八年横濱港に毎
 日新聞を發刊す後ち元老院
 書記生に任じ同十三年文部
 権大書記官に轉じ正六位に
 叙せらる翌年政府と意見の
 合さる所より本官を辞して
 毎日新聞主筆となり又大隈
 伯と謀りて改進黨を組織し
 翌年神奈川縣會議長に舉ら
 れ同廿年政友諸邦を巡遊す
 るに掲る和歌ハ夕春雨と云
 ふ題にて詠みたる者なり



君ハ周防國三田尻光妙寺住
職半雲上人の子なり幼シ
て大志あり漢英の学を修め
後ち水戸孝允伊藤博文氏
等の推輓に依て仏國に游学
し法律学士の稱号を得て帰朝
し太政官權少書記官に任す
明治十五年仏國公使館書記
官に轉し同十九年檢事に轉
ト民法起草委員たり同廿
二年逓信省參事官に任す
此詩ハ君ハ明治戊辰美作津
山藩に至る途上の口占也



伯ハ旧平戸藩主にして安
政元年肥前守に任す明
治元年勅命を奉じ兵士
を與羽地方に出し王事
に功勞あり同三年制度
寮總裁に任じ後ち小教
正に補せられ又麿香間祇
候となり後三位勳四等に
叙せらる次て御哥會賛
者を拝命し同廿一年宮
内省御用掛常宮御養育主
任を仰せ付けらる爰に記
すハ川氷と云ふ題にて
詠みたる歌なり



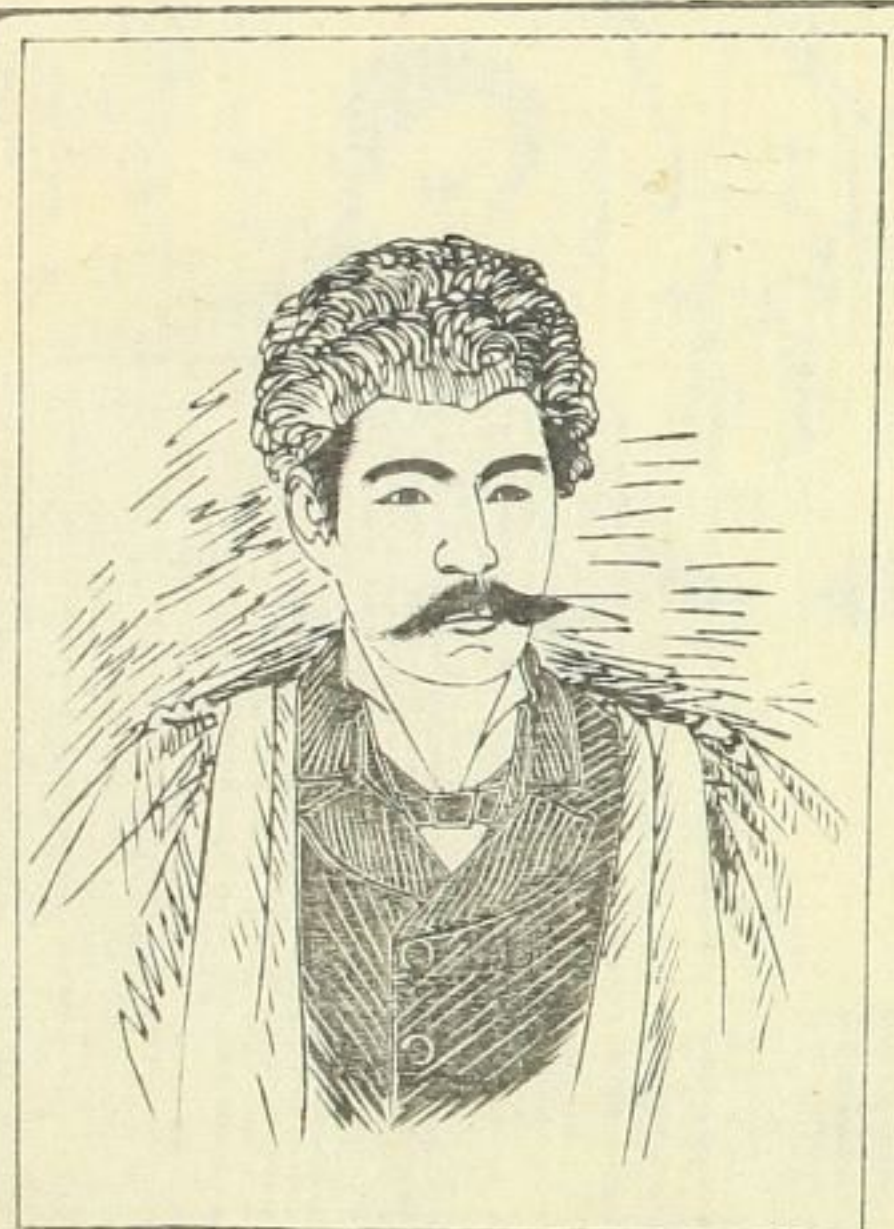
侯ハ誠實廉潔にして忠君
 愛國の志厚く之を以て夙
 に今上陛下に近侍し毎に
 能く陛下を輔賛す誠に侯
 の如きハ陛下股肱の良臣
 と謂ふべきなり而して明治
 の初めより歴任せし所を
 按ずるに参議に任じ又宮
 内卿となり侍從長となり
 今や内大臣の高きに陞れ
 り人臣の栄も亦茲に至りて
 極まる此處に記す哥ハ岡若
 菜といふ題にて詠める者なり



二位勲一等侯
 徳大寺實則

梅
 若菜

日本第一法律大家の称ある
 君ハ元羽前天童藩士なり明
 治三年大学南校に入り佛蘭
 西学を修め後ち司法省に出
 仕し同九年政府の命に依り仏
 國に留学し巴里或ハ里昂大
 学に入り苦学五年にして学
 士の称号を授りて帰朝するや
 外務書記官に任じ再び佛國
 公使館詰となる後ち判事検事
 参事官等を經任し正六位と叙
 せらる下の哥ハ君始めて羅馬
 律を繙きし時に詠し者なり



六位
 官城浩藏

若菜

君ハ朽木縣人なり少壯にして
漢洋の學を修め才幹群衆に
超越せり明治六年板垣伯初め
て自由民権説を唱ふ君伯ふ
賛同して尔来国事に奔走一
十八年朝鮮事件發覺して捕
に就き獄に繋れ慘憺たる苦
楚を嘗む同廿二年大赦令に
遇て出獄するを得たり尔来令
名天下に噪く世上往々内務
陸軍大臣の候補者を以て君を
評價する者あり茲に載る哥ハ朝
鮮事件を企し時に詠たる者なり



子ハ山口出身なり嘗て勤王
の志厚く討幕の事に奔走
して大に功勞あり明治の
初め召されて外國事務判
事に任下後ち特命全權公
使となり海外諸國に航し
居ること數年帰朝の後ち外
務次官となり幾もなく大
臣に榮進し最も至難なる
外交の枢機に當る之を以て
子の豪傑たるを知るに足れり
此哥ハ彼我交際のありさま
を詠たるものなり



君ハ安政二年備中国加
陽に生る嘗て慶應義塾
に入りて英学を修む後
ち郵便報知新聞社長矢
野文雄に聘せられて其
記者となり明治十三年
統計院書記官に任正
七位に叙せられ一が故
あり辞職し大隅伯に結
び共に改進黨を組織し
又朝野新聞民報等の記
者となる木堂ハ其号な
り茲に掲ぐるハ鹿兒島
討の時作りたる詩なり



君ハ舊西條藩士に元
姓ハ内田氏なれども三浦
氏を嗣ぐ明治四年和哥山
藩参事に任ト後ち左院
四等議官に轉ト同八年
内務権大丞圖書局長修
史館監事等に歴任ト同
十五年元老院議官に陞
リ今や後三位勲二等た
り其風骨の巍然として
温良諒然たる処ハ多く得
かたき君子と謂つべし
下に記す哥ハ赤心報國
と題し詠たるものなり



侯ハ佐賀藩主閑叟公の
 嫡男として明治元年参
 與に任じ同四年佐賀縣
 知事に轉ず後ち英國に
 赴き制度視察の爲めに
 留まること數年にして
 帰朝するや伊國特命全
 權公使に任じ同十五年
 元老院議官となり同十
 八年式部長官に任じ現
 今正三位勲二等たり此
 處に載る一首ハ嘗て侯
 が千鳥と云ふ題にて詠
 れたる歌なり



正三位勲二等侯爵
 松平直大

後四位勲五等文學博士末松謙澄
 君ハ豊前前田の人少壯にして漢英の
 學を修め才名遐邇に鳴る明治七年東
 京日々新聞記者となり翌八年
 太政官
 御用掛
 を拝命
 後ち陸軍工部
 外務諸省に出仕し又英國に航しケンブリッヂ大學に入り政治法律學等を
 攻め歸朝して文學博士の學位を受く又内務省縣治局長に任じ勅任に陞り
 後四位に叙せらる



初めは...
 ...
 ...
 ...
 ...

君ハ讃岐丸龜の人にして氣宇快濶光風霽月の概あり少壯にして大学に入り法科を専修し明治十八年法學士の學位を授かり後永國公使館書記官に任じ同廿一年歸朝して外務參事官に陞進し正六位に叙せられし翌廿二年大隈伯と外交政略の意見相合ハす辭職して中外電報の主筆となる爰に掲る一首ハ永國史を讀みし時の哥なり



予ハ舊主佐藩主戊辰の役に藩兵を率て各地に戦ひ大軍功あり鎮定の後陸軍少將に任じ明治七年台灣に遠征し後西南の役に熊本城に據て薩賊と苦戦し拔群の功を奏す之を以て中將に進み後二位勲一等子爵に叙授せられ後農商務大臣に榮轉し幾もなく欧米諸邦に官遊し歸朝の後内閣諸大臣と意見の合ハる所あるを以て辭職す爰に記す哥ハ予が嘗て主政復古の意を詠漫二位勲一等子爵のなり

從三位勳等男爵本田親雄

男ハ鹿兒島出身なり嘗て

明治維新に際し

王事に功勞

ありしを

以て同八年

元老院を設けらるゝの

後ち議官に任じ同十六年

勳三等に叙せられ同二十年特に男爵を授かり華族に

列す後ち從三位勳二等に進み同二十三年行政裁判所

評定官に任す此處より記すハ雪に題して詠たる歌なり



雪の白き花の如く
春の來るを待つ

君ハ出雲国出身なり幼
にして漢英の學を講習
長ずるに及びて英國に
航しオクスフォード大
學に入り哲學を専修する
こと七年間業全く卒て歸
朝の後ち後藤伯と結ひ
大同團結の必要を主唱し
傍ら政論の編輯を掌りし
が偶ま新聞條例に觸れ禁
錮の處刑を受く出獄の后
大同東洋面新聞の主筆
たり茲に載る哥ハ君の懷
抱を詠たるものなり



菅了法
雪の白き花の如く
春の來るを待つ

君ハ肥前の出身にして
少壯の頃に長崎に於て蘭
學を修め、后ち王事に奔走
し、援群の功を挙げ、明治元
年、外務省に出仕し、次
任、民部大蔵外務省等に歴
任し、同四年、特命全權副使
となりて、欧米諸國を巡視し
同八年、元老院議員に任じ
又會計検査院長に進み、後
ち再び元老院に入り、從三位
勲二等に叙せらるゝ爰
に掲る哥ハ、國と題して
詠たるもの也



君ハ天真爛漫として日本
男児の氣象を具へ、嘗て大
井憲太郎氏に朝鮮政府顧問
の事を企て、其名天下に
高し、而して其専修の學問
ハ、仏蘭西人レランデユリ
ーに就きて之を攻習した
り、故に君が常々信する所
ハ、ルーソーとボルタイン
の説なりと云ふ、今此下に
掲ぐる一首ハ、朝鮮政府を
倒さんことを企て、入獄
したる時に詠める和歌也



君ハ現今名古屋市に住するも元伊勢国
 鈴鹿郡の産なり幼に穎悟群童
 に異なる所あり長するに及んで
 大家に就きて法律を學
 び代言人の免許を受
 け名古屋に移りて代
 言に従事す明治廿一年愛知縣會議員
 に當選し任期中之を辞任せし後再撰の光
 榮を得し亦以て其衆望あるを察するに足れり
 今爰に掲ぐるハ益し述懐の和歌なり



あゝもはや世を去るは月日は
 づゝと過ぎぬを思ふ

美濃郡貞亮

君旧島原藩士なり明治元
 年長崎總督府に出仕し後
 ち神祇官判事に轉す同四
 年公議所副議長となり次
 て外務大丞に任す同五年
 國憲に觸れ終身禁錮に處
 刑せられしも同十三年特
 赦を得て出獄し後ち宮内
 圖書助に任す同廿年政務
 各國制度視察を命ぜられ
 帰朝の後ち元老院議官に
 陞る下に載るハ菊契千秋
 と云ふ題の哥なり



後四位九山作樂
 子規

菊契千秋

君ハ土佐の出身にして慶應
の末年勤王討幕の事に奔走
一王政維新の事業に與かりて
功あり後ち神奈川縣令に任
トマリヤル船事件を裁判して
大に我國威を輝かし明治十一
年政府顛覆の事を企て一科
に依り禁獄十年の刑に處せ
られしも同十八年特赦の恩
典を得て獄を出づ今茲に記
すハ君が明治戊辰勅書に
錦旗と奉して高野山に下
り一時の詩なり



君ハ會津の舊家老にして資性温良誠實なり明治五年陸軍に出仕一軍制百般の
事を整理して頗る功績あり後ち大佐に進み東京軍法會議の判士となり
或ハ士官学校の理事となり或ハ西南の役に
出馬して偉大の勲功あり之を以て少將に陞り
後四位勲三等に叙せらる
今此下に記せる
一首ハ慶應のホ
年に詠たる歌
なり



菊池九郎

海

海

海

君ハ
夙に漢
洋の学を修め

明眼達識の聞えあり明治

四年舊藩主津輕伯の囑托を

受け弘前に東興義塾を創立し

常に七百内外の子弟を教育

一旦大に實業の振起を圖る嘗て天皇東北地方に巡狩せられし時君の家に

行在し玉い時君は謁見の榮を賜はり云ふ後ち郡長小任ト市長と

なる此に掲ぐる一首八君の國事に奔走する懷を詠たる哥なり



侯ハ舊琉球藩王尚昇氏

の長男にして資性英邁

能く人を統るの才畧あ

り明治の初年家督を相

續し尋て藩王に任ト全

島の政治を舉揚し大に

功勞あり同十二年政府

琉球藩を廢し更に沖繩

縣を置く時侯ハ華族

に列し東京移住を命ぜ

られ同十八年六月特勅

して侯爵を授かる今茲

に掲ぐる和哥ハ侯が鷺に



舊琉球藩王正三位侯爵尚泰

あゝ東のしるし

あゝ東のしるし

あゝ東のしるし

あゝ東のしるし

あゝ東のしるし

東洋のコンパテンブライト
 の称ある君ハ舊細川藩士
 たり明治五年熊本参事に
 任ト後七位叙せられ后に
 賀縣権令に榮進せしむ大に
 思ふ所あり辭職して實業に
 従事し且傍ら地方教育の隆
 盛を計り大に文明の空氣を
 熊本地方に充滿せしむる
 に至りハ偏し君の力に
 因れりとす此下に記す
 君の哥ハ新日本の青年
 と云へる書の首に題し
 詠たるものなり



山田武甫

文思一巻

君ハ豊前の人にして幼に漢
 書を修め嶄然頭角を現はす
 元治元年福澤諭吉と協力
 一英学塾を開設し後ち幕
 府の開学校助教となり
 明治元年辭職して著述
 に従事し又慶應義塾の
 教授を擔任す同十二年学
 士會院の會員に撰はれ一
 翌年之を辭す後ち交詢社を
 設立し幹事に舉らる爰に
 掲る俳句ハ蓋し議員の舉
 動を評したる意ならん



小幡篤次郎

文思一巻

侯ハ藤原公李公の嫡孫なり
 慶應の末征討總督を命ぜら
 れ錦旗寶刀を賜りて山陰北
 越與羽各地に出軍一到る處
 能く賊徒の銳鋒を挫きて鎮
 定に歸せしめハ誠に侯の力
 とす明治六年欧米諸邦に游
 び永く佛國に止まりて政治
 法律學等を修め帰朝の後ち
 新聞に従事せし故あり
 て之を罷め特命全權公使
 に任ぜり爰に載るハ菊に
 題して詠たる哥なり



君の家ハ世々豪農にて大
 庄屋を勤む君幼にして古今
 英雄豪傑の事跡を慕ひ和漢
 英の學を修め學力知見衆に
 越り明治七年東京に於て評
 論新聞を發行し後ち國會開
 設の請願を政府に提出し同
 十二年石川縣地租再改正の
 事を政府に請願し同十四年
 板垣伯と共に自由黨を組織
 し同十七年清國に航し次で
 欧米に遊び歸朝の後ち福井
 縣會議長となる



君ハ岡山縣人にして嘗て
板垣伯と訂結し愛國社を
再興す蓋し是れ明治九年
なり同十四年自由党創立を
計画し結党の後ち幹事に
舉られ又自由燈を發行して
盛ん自由民権の大義を唱
へ同廿三年大同愛國自由三
派の合同を斡旋して大に力
あり君資性磊落洒々とし
て偉丈夫の風采あり茲に
記す歌ハ政友某の墓に詣
て詠たるものなり



子ハ慶應年間仙國に使用
明治元年大阪府判事に任
翌年従四位に叙せられ
後ち元老院議官に進む同
十四年勲三等に叙せら
れ又同十八年勲二等に
陞り同二十年勲功に依
て特に子爵を授かり華
族に列す後ち後三位に
昇り錦雞間祇候となり
今此下に載る一首ハ述
懐の歌なり



とてあゝさしよふおちなはあゝ
 伯嘉永

七年京都に生る明治二年家督
 と相續一後四位に叙せられ
 少講義
 なる同十
 年大講義に補せられ同十三年
 権少教正に進む後ち宮内省
 御用掛となるに及んで教職を辞す
 同十七年伯爵と授かり後ち宮内殿掌に任下其取締
 となる同廿年正四位に陞り翌年御所参候を拝命
 す茲に掲ぐるは曙と云ふ題にて詠みたる歌なり



正四位伯爵
 冷泉為紀

君嘉永三年讃岐国三野
 郡財田村に生る如に
 て漢英の学を攻め又仁
 学に遷一既に印度哲学
 世間説と題する著書あり
 明治十六年より屢々縣
 會議員に撰舉せられ
 も辞して就任せず後ち
 板垣伯に結び愛国公党
 の組織に盡力一期衆議
 院に出てハ投票多數を以
 て第五部委員に當撰す
 爰に載る哥ハ学道と題
 して詠たるものなり



伊藤一郎

学道
 伊藤一郎
 の人

君ハ舊山口藩士にして該藩の參政公議後たり明治の初め政府の命に依り歐米諸邦の制度を視察し歸朝の後文部六等出仕に補せられ次て大丞に陞り敬部大丞を兼ねり同八年故廣澤參議殺害事件審問の參座となり同十三年元老院議官に任し同十七年博物局長を兼ね同廿三年錦雞間祇候となる下に記すハ夏雨と云ふ題の歌なり



あゝさりり
こゝ免
うゝるち
うゝるち
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは

君ハ淡路の人にして天資温良恭謙の美德を具へ殊に事理を能く直截するの腦力に饒かなり故に改進黨中に於ても亦君ハ最も枢要の地みに在り其少壮たるや慶應義塾に英學を修め後ち商業に従事し又神戸新報社長となりて頻りふ改進主義の擴張を計ると云ふ下に記すハ君の豈て郭公を待つ意を詠し歌なり



鹿島秀磨
あゝさりり
こゝ免
うゝるち
うゝるち
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは
けふこゝは

子ハ光宙卿の長子なり
 慶應元年中務少輔に任
 一正五位に叙せらる明
 治八年後四位よ陞り同十
 六年子爵を授かり翌年
 元老院准奏任御用掛を
 命せられ次て宮内省奏
 任御用掛を仰せ付られ
 後ち正四位に叙せらる此
 下に記す一首ハ寄川祝
 と題して詠たる歌なり



君ハ埼玉縣人にて頗る学
 識に富み又政理に邃一明治
 七年戸長となりし自由民
 権の大義を唱ふの急務なる
 を覚り辞職して政治上の事
 に奔走す同十六年縣會議員
 に當撰し縣河の雄辯を奮ふ
 て大に縣民の意見冀望を代
 表す其他官衙学校新築費
 を義捐し貧民及罹災者を
 救助して褒賞を得たる事
 屢あり爰に記すハ古戦場
 を過きて詠たるもの也



君ハ茨城縣信太郡鳩ヶ
村の人。て明治七年區
長となり後ち縣會議員
に當選せしが幾もなく
之を辭し専ら祖先傳來
の上菱醬油製造改良の
事に刻苦し又上菱麥酒
を釀造し大に世の喝采を博
す后ち為挽回漕會社を興
又煉瓦製造所を設け盛んに
實業の振起を圖る又國會初期
にハ第七部委員に挙げらる爰
に記すハ君の賢所參拜を許
され一時に詠たる哥なり



重野安繹

君ハ魔嶋出產の人にして
夙に碩学鴻儒の稱あり明治
の初め政府の召に依て太政
官修吏局に出仕し進んで編
修長官に任し元老院議官に
陞る同廿年臨時全國寶物取
調委員及皇室制度取調委員
に兼任し又文科大学教授に
補せられ同廿一年文学博士の
學位を受く而して其官等位
勲ハ勅任二等從四位勲五等
なり下に記すハ晴天の鶴と
云ふ題にて讀めし哥なり



重野安繹

侯ハ前大納言忠能卿の子
 にて人となり剛毅頑邁
 能く衆人に敬服せらるゝの
 風采を具ふ明治七年後五
 位に叙せられ同十年太政
 官書記官見習に補せられ
 同廿年宮内書記官に任じ
 同二年皇太子殿下勤務長
 を仰せ付けられ次で東宮侍
 役長に陞り勅任二等俸を
 賜はり又後四位に進む茲
 に掲る歌ハ春曙と題して
 詠たるものなり



正四位
 侯爵 中山孝磨

君幼く尺振八先生に就き英
 学を修め後ち法律を學び代人
 となり其名を天下に知る蓋し君
 が公私の限界を嚴劃して毫も情實
 に拘らざる往々世人の驚嘆する所
 にして往年改進黨結党式の時に大隈
 伯と総理に争ふ事を非難し又
 國會議員候補者と同選挙区内
 於て實兄と競争せし如きこ
 とハ君の行事の非凡なる所と
 見るに足らん辨論壯快起筆絶倫
 此詩八月瀬の作なり



春入洞天
 花枝子
 色一
 香柳
 人吟
 舟依
 雪耶
 乃一
 山歌

君ハ長崎縣北高来郡諫早村
 の人にして代々富豪を以て
 九州地方に知られ殊に名家
 の称あり君明治の初め王事
 に勤勞一大功績あり之を
 以て朝廷厚く其功を賞せら
 る後西南の役王師を助け
 功は依り正六位に叙せられ
 又海防費献納の廉を以て銀製
 黄綬章を賜はる而して天
 皇に謁見の榮を賜ひ事も
 亦に屢々あり此歌ハ君の嘗
 て梅子題一詠たるものなり



後六位諫早一學

君ハ舊二本松藩士なり博く
 和漢の學に通じ和歌を善す
 明治二年市正を拝命し同四
 年若松縣九等出仕に補せら
 れ翌年同縣典事に昇任し同
 七年本官を辭して政社明ハ
 會を起し同十一年福島縣會
 議員に撰まれ次て議長に進
 み後同縣安達郡長に任せ
 られ在職五年にして本官を
 辭せり此哥ハ維新の際藩兵
 官軍に通ずるの嫌疑を以て
 獄に下さる途上の詠なり



安部井

君ハ羽後國飽海郡廣岡村の人
 往時關東の一大豪族
 たりし安部頼時の後胤なり
 少壮にして神儒佛三道の蘊
 奥に通曉し蚤く屹然として
 頭角を世に顯はし明治十一年
 縣會議員に當選し後累進
 して副議長に挙げられ又農
 工商諮問會負衛生會負其
 他勸業教育諸會の會負に公
 選されし事あり下に掲げる哥曾
 て思ひ出るに任せて詠れしもの



子ハ石見國の出身なり文
 久三年朝廷の召に依り京
 都に出て、御親兵取調
 御用を勤め明治元年神
 祇局権判事に任じ御即
 位式取調主任たり翌年
 侍講に進み同四年歌道御
 用掛を命ぜられ後ち東京
 女子師範学校総理となり
 同十六年大政紀要編纂局
 主幹となり同十八年元老
 院議員に任じ同廿年子爵
 を授かる爰に載るハ山月
 高と云ふ題の歌なり



君ハ静岡出身の人にて
 幼より和漢醫學を講修
 其高談雄辯の四定を驚か
 すが如きハ君が獨得の伎倆
 とす茲に掲ぐるハ立憲自由黨
 を脱したる當時物議を受
 けたる時よめる歌なり

君ハ万延元年二月讃岐國阿
 野郡阪出町に生る幼にて
 大志を抱き明治十二年東京
 に出で同人社東京英学校
 慶應義塾に游学して以て
 英漢の學を修むること數
 年大に得る所あり後ち香
 川縣會議員に當撰尋て
 同縣會副議長に舉らる
 其高談雄辯の四定を驚か
 すが如きハ君が獨得の伎倆
 とす茲に掲ぐるハ立憲自由黨
 を脱したる當時物議を受
 けたる時よめる歌なり



綾井武史

君ハ静岡出身の人にて
 幼より和漢醫學を講修
 其高談雄辯の四定を驚か
 すが如きハ君が獨得の伎倆
 とす茲に掲ぐるハ立憲自由黨
 を脱したる當時物議を受
 けたる時よめる歌なり

君ハ静岡出身の人にて
 幼より和漢醫學を講修
 其高談雄辯の四定を驚か
 すが如きハ君が獨得の伎倆
 とす茲に掲ぐるハ立憲自由黨
 を脱したる當時物議を受
 けたる時よめる歌なり



松本順

侯ハ前大納言實愛公の
 男に於て慶應二年侍從
 に任ト從五位に叙せら
 れ明治八年正五位に進
 み同十五年侯爵を授か
 り後ち從四位に陞せら
 る今此下に載る一首ハ
 花を思ふてよめると題
 したる和歌なり



君ハ豊後佐伯の出身に
 て明治四年慶應義塾に
 入り漢洋の学を攻究し同
 八年郵便報知新聞主筆と
 なり同十四年東京府會議
 員に撰まれ後ち改進黨
 の評議員となり又壬午銀
 行役員ス舉られ同廿一年
 欧米諸邦を漫遊し文物
 風土を視察して帰朝す号
 を鳴鶴と云ひ文明東漸史
 の著あり茲に掲ぐる詩
 ハ君が嘗て政遊中來因
 河を溯りて作る所なり



君ハ少年の頃既に生國鹿嶋を脱し英仏諸邦に游びて海外の景況を視察し歸朝せし頃ハ慶應元年にして天下鼎沸の時なり君茲に立して大に王事に盡力す明治の初め太政官兵部省等に仕出し再び海外に官遊し後滋賀縣知事に任じ大に治績あり同廿二年元老院議官に陞り後三位勲三等に叙せらる今爰に掲るハ君の懷田の哥なり



後三位勲三等中井弘

君ハ備前出身の人なり明治の初め岡山藩参事に任じ後ち廢藩置縣の令あり茲に於てか更に岡山縣七等出仕に補せられ又六等判事に進みし同九年本官を辞し後ち支那に遊ふ薇山と号し儒雅風流を以て其名當代に高く夫の小松原英太郎黒田綱彦関新吾氏等の如きハ皆な君の薫陶したる人なりと云ふ



西穀一狂道

正五位子爵加納久宣

子八舊二宮

藩主にして慶應三年遠
江守に任一後五位に叙

せらる明治二年一宮藩

知事に任ト翌年政米諸邦を巡遊一同六年帰朝

して文部省督学に任ト同十年岩手縣師範学

校長となり同十四年判事に任ト熊谷裁判所

長たり同十五年大審院檢事に轉ト正五位に

進む此所に記す一首ハ秋野と云ふ題の哥なり



あけのけ

ま

あけのけ

あ

君ハ美濃の人なり嘗て本
居氏に就き國學を修め和

哥を善し一餘技笙笛に長

す明治六年學區取締を拝

命し同九年第七十六國立

銀行を創立一頭取に就任

一同十二年岐阜縣會議長

となり同十七年縣會議員に

再撰せられし之を辞任せ

り今此ニ掲ぐるハ帝國議

會の開院式をおこなハセ

たまひける日賢所ねをか

み奉りてよめる哥なり

吉田耕牛

あけのけ



あけのけ

君の家ハ代々豪農とて
三河国碧海郡内に鳴る
君嘗て我國農業の不振
を歎き曩に米国に航し
て談国の農業を視察し
帰朝の後頻りに我國
農事の改良を図り或ハ少
年子弟に學資を與へて外
國語を學ばしめ將た新聞
を發行して三河分縣論を
唱へ遂に縣會副議長の
椅子を占め此處に載
る和哥ハ猿飛岩のもと
にて讀める者なり



子ハ京都の人なり明治の
初め禁裏監守を命せられ
同十五年宮内省殿掌に任
ト正五位に叙せらる翌年
特ニ子爵を授けられ京都
宮内省支廳の事務を操る
後ち歌道の追年衰ふるこ
とを慨き山階久通西宮親
王殿下等と謀りて邦光社
を設立し頻りに歌道の復
興を圖る云ふ此下に記
す一首ハ春曙と題して詠
たる和歌なり



伯耆名ハ市之丞と呼び元
 萩藩士なり夙より勤王の志を
 抱き討幕の事に全力を盡
 一遂に王政復古の功を樹
 つ明治五年召されて陸軍
 少将に任し後西南の後
 に後軍一砲烟剣華の裡に
 驅馳して偉大の功を奏し
 乱平くに及んで中将に進
 み司法大臣に任し大に司
 法制度を整ふ功成りて野
 に退く現時正二位勲一等
 伯爵たり



正二位勲一等
 伯爵山田顯義

君ハ肥前唐津の人なり嘗
 て大学に入り螢雪苦学の
 功を積み政治経済等の
 全科を卒業し文学士の学
 位を受く明治十五年大隈
 伯の設立に係る東京専門
 学校の講師となり後ち理
 財雑誌の主筆となり又経
 済原論を著作して以て大
 に我國人に経済思想を注
 入したり此歌は君の著し
 たる萬國歴史第三版の序
 に掲けたるものなり



文学士山田顯義

君ハ安政二年志摩國鳥羽に生る明治五年東京に出で同人社に於て漢英の學を修め後ち草莽雜誌の主筆となり又板垣伯の愛國社創立を輔く同十四年伯に従ふて歐米諸邦を漫遊し清仏乃戰ひ起るや自由新聞特派員となりて上海に航し後ち東雲新聞記者となりて侃々諤々の筆を揮ふ今下に記す哥ハ思ふに君の抱懷を詠たるも乃なるべし



男ハ山口の出身なり嘗て幕府の末路皇室の式微を歎き奮ふて倒幕の事に幹旋し遂に王政一新の洪圖を建つ其功は依り明治七年群馬縣令に任じ在職八年間大に治績を貽せり同十六年元老院議員に榮轉し同廿二年憲法發布紀念章を拝受す現今錦鶏間祇候從三位勲三等男爵たり爰に記すハ天長節に詠みたる哥なり



予も信りてゐる

正四位伯爵 清棲家教

伯父故

伏見邦家

親王の男に

て明治元年真

宗仏光寺の法系を嗣ぎ北越

征討の王師に従ひ該地方に

赴きて大義名分を説き人民を諭す

翌年北海道に到りて開拓事業を提理し同五年仏光寺住職となり華族に

七年少教正に補せられ同十三年大教正に進み同廿一年伏見宮後帰を命せられ特に伯爵を賜はる此歌ハ濁世と云ふ題にて詠みたるものなり



君ハ富山縣の人にて明治

八年学区取締を拝命し同

十年青森縣警部に任し後

ち辞職して改進黨擴張の

事に奔走し同十六年縣會

議員に當撰し議長に舉ら

れ又礪波公立教育衛生兩會

長に推さる其他重要な國事

に關して政府に建言せし

こゝ其數幾十度なるを知

らす此下に載るハ宮城に

於て大憲發布の盛典に参

列して作る詩なり

宣揚 島田孝之

乃是

現聖

代天

天

顔

顔

列



子ハ舊山口藩士ナリ維新
前後王事に與かりて最も
功あり明治六年教部大輔
に任し後清國特命全權
公使に榮轉一大に日清兩
國の交際を圓滑ならしむ
る事を計りて功あり又元
老院議官に任し正四位勲
二等に叙し子爵を授かり
今や貴族院に出て高く鯨
吼を吐けり



君ハ福島出身なり少壯篤
を負て東京に出て岡鹿門
先生に就き漢書を學び後ち
外國語學校に入りて獨り学
を修め又東亞醫學校に入り
て醫術を攻究し次て大日本
衛生會を組織して衛生の功
用を世人に知らしむ又初期
の衆議院に出づるや常任
委員第三部の理事に撰は
る以て君の人物なる事を知
るべし爰に記す歌ハ君が
思ふ事ありて詠たるもの也



君ハ芳野金陵先生の男
なり嘉永二年に生れ儒
を以て任ず明治十二年
東京府會の議員に撰ば
れ副議長の椅子を占め
同廿二年東京市會議員
に舉られ議長代理者こ
なり又參事會員の地位
に進む其他市區改正及
東京市公共の事就き君
の關係せざるもの發ん
ぞ稀なり今此下に掲る
哥ハ楠公に題して詠た
るものなりと云ふ



男の祖先ハ天照
大神の二子天



總日命にして男に至るまで數千代出雲大

社の宮司職を

繼續す明治五年大教正に補せられ大宮司となり后ち大社

教管長の職に就く同廿一年元々院議官に任じ役三位

に叙せられ次で特々華族に列せしめらる其資性博愛

なる貧民を救助し公共事業に金

圓を投し賞を得しこと屢々也

此哥ハ楠公秋之云ふ數と詠たる

者也



澤三佐男爵千家爵後
秋之云ふ數と詠たる者也

君ハ駿河國沼津の人なり
 少壮にして東京に出て漢
 学を修め後ち沼間守一河
 津祐之氏等と就き法律を
 学び代言人となり又嚶鳴
 社の幹事に撰はれて社務
 を幹理す明治十四年東京
 神田區會議員に撰はれ同
 十九年東京府議員に舉ら
 る現今東京に於てハ屈指
 の代言人たり此下に掲る
 ハ君ガ豫算案と題して詠
 たる俳句なり



子ハ魔島出産なり明治維
 新の大業を翼賛したる功
 に依り諸官を歴任して元
 老院議官に任ト後四位勲
 三等に叙せらる同十六年
 特子子爵を授かり華族に
 列す同廿三年後三位勲二
 等に進み又憲法發布紀念
 章を拝受し翌年錦鶏間祇
 候を仰せ付らる此下に掲
 る和歌ハ子ガ嘗て春と題
 して詠みたるものなり



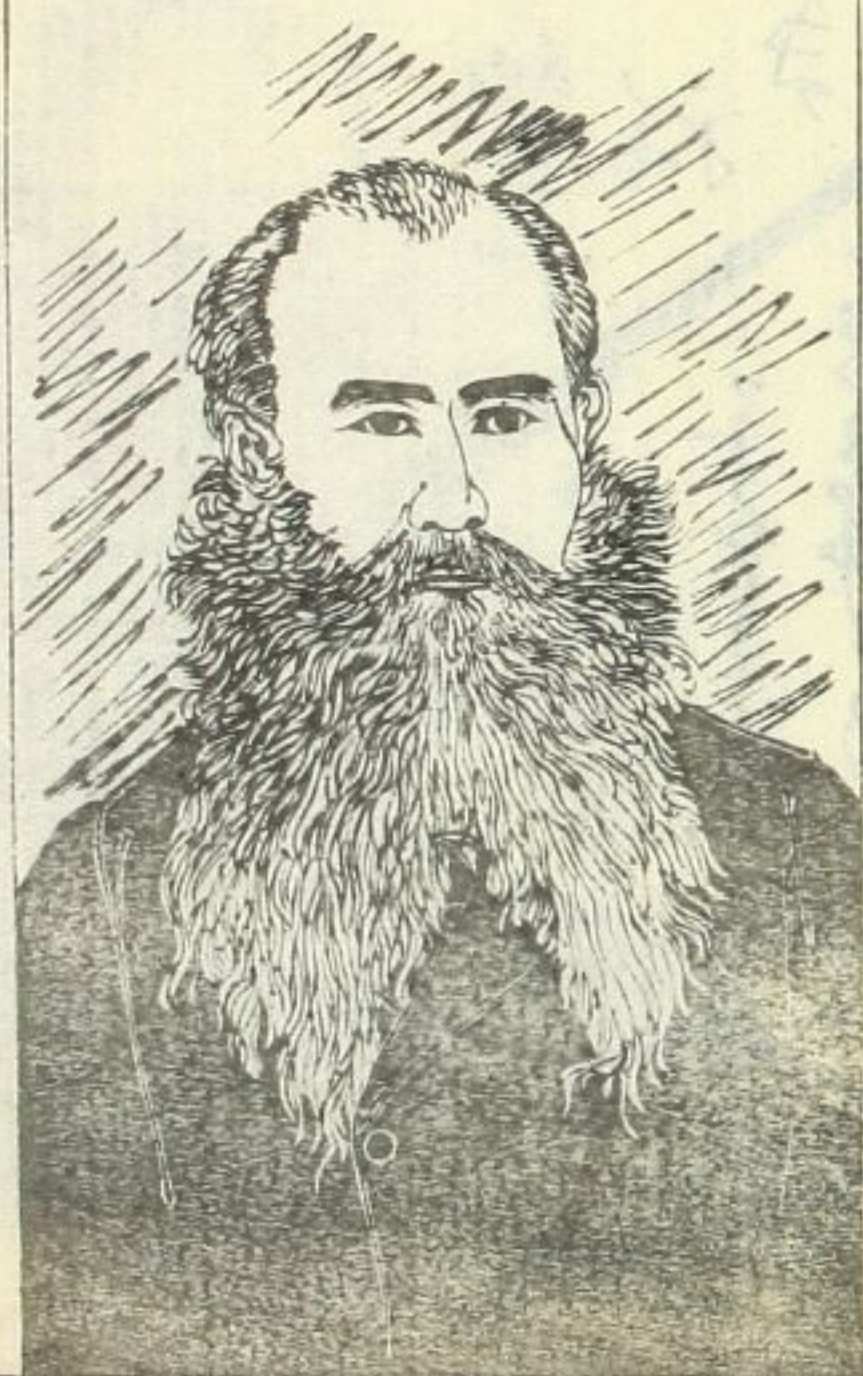
公ハ舊長州藩主大膳大夫
 慶親侯の男ヨリて明治二
 年藩知事に任ト役四位不
 叙セらる同九年正四位に
 進み次て爵香間祇候を仰
 せ付られ同十三年勲二等
 に叙せらる同十六年公爵
 を授かり同廿一年正二位
 勲一等に叙せらる此下に
 掲る一首ハ夜郭公云ふ
 題にて詠みくる和歌な
 り



三位
 勲一等公爵
 毛利元徳

公ハ舊長州藩主大膳大夫
 慶親侯の男ヨリて明治二
 年藩知事に任ト役四位不
 叙セらる同九年正四位に
 進み次て爵香間祇候を仰
 せ付られ同十三年勲二等
 に叙せらる同十六年公爵
 を授かり同廿一年正二位
 勲一等に叙せらる此下に
 掲る一首ハ夜郭公云ふ
 題にて詠みくる和歌な
 り

君ハ槍術を以て細川一
 藩に名あり嘗て細川侯
 君を近役に任し藩政の顧
 問となす君為り藩主の
 寵遇を蒙ること多かりし
 と云ふ後ち熊本区長に任
 じ大に治績を奏す明治十
 年西南の乱起るや縣内
 人民を以て其方向を誤
 らしめざりハ偏小君ダ
 項天立地して以て大義
 名分を説示せしに由
 る下に録せしハ君が西
 南の役に詠みくる哥なり



前田素山子 諸人
 ことしん くの命

後すみまふ

侯ハ舊加州金澤藩主に
 して嘗て王事に勤勞ある
 を以て賞典祿三千七百五
 十石を賜はり明治十八年
 勲功に依て侯爵を授かり
 後ち宮内主簿官に任じ
 現時從三位なり其侯が學
 校病院火水罹災者救恤
 海防費等に金穀を寄附
 献納したるが爲めに金銀
 杯紀章等の褒賞を賜ひし
 こと其幾數度なるを知る
 可らず爰に掲るハ山家卯
 花と云ふ題の歌なり



君ハ旧土佐藩士なり戊辰の戦功を
 以て中老職に進み後ち少参事に
 任す明治四年政府の命を受け政
 米諸邦を巡視同六年海軍中佐に
 任せらる然るに君ハ政府と意見の
 合さることあるを以て官を罷め
 野に下り尔来政治改革の事に奔
 走す此間法網に繋りて獄裡の苦
 楚を嘗ること屢なりは實に是
 れ君が半世の経歴中に一種の出色
 たり温たる其顔端たる其態一箇
 君子人の風采を具ふ此哥嘗て清
 盛の墓に詣で詠たる者なり



君ハ少壮にして本居の門に入り大に國典を研究し文久元年紀州侯の招聘を受け該地より行き藩士に國學を教授し又幕府の屈請に依り和學所に出て令義解及公事根源等の書を講ず明治四年大学の教授に任じ後ち學士會員となり又文學博士の學位を受け現今日本國學者の泰斗を以てせに噪かし爰に掲る哥ハ山家餘花と云ふ題にてよめるものなり



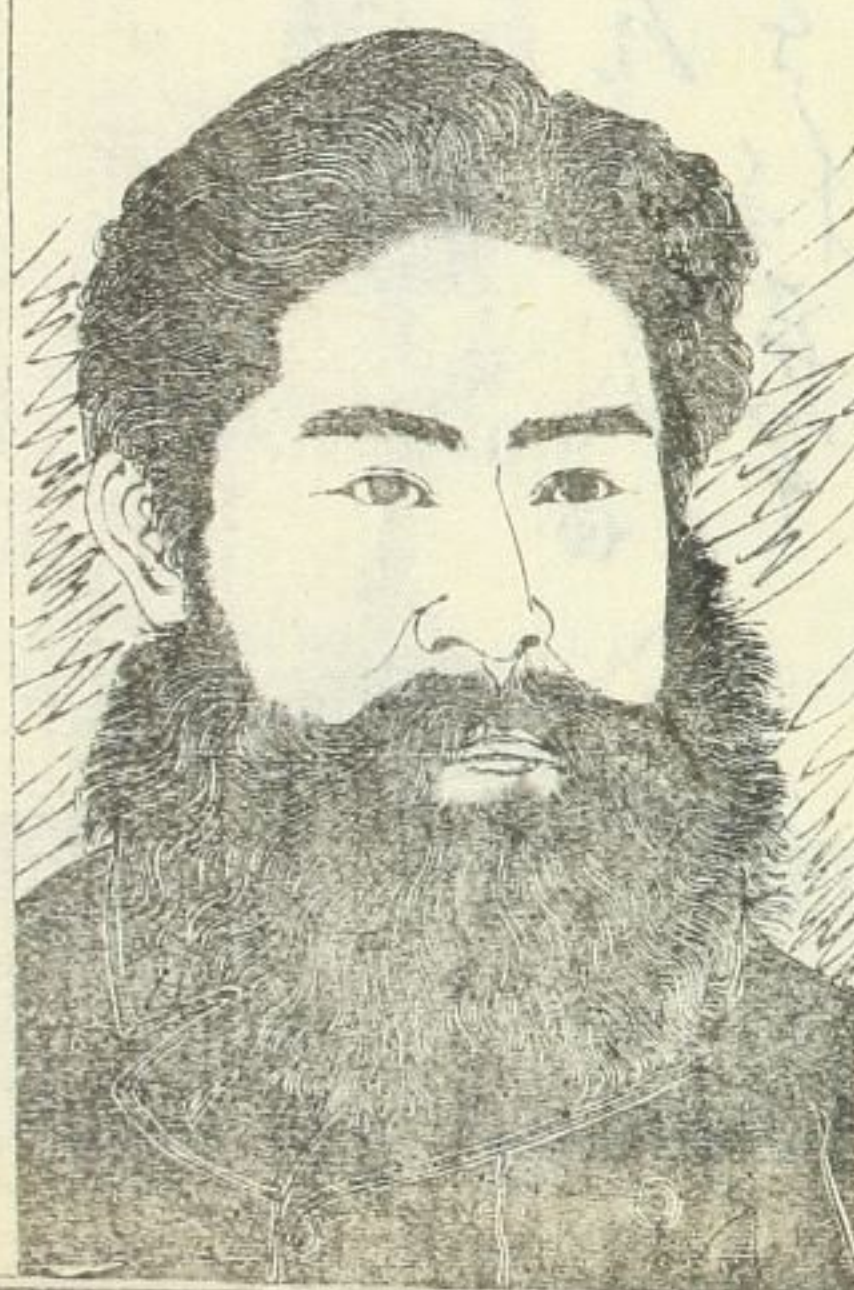
君ハ夙に自由主義を執り奇言奇行を以て其名を天下に知らる明治十二年國會開設請願委員に撰はれて東京に出て大に其事に力を盡し後ち愛媛縣會議員に當撰し示來香川縣を再置せらるゝも始終其職に在り而して永く縣會議長の椅子を占めたりハ亦以て君の人物如何を知るに足れり此に掲ぐる君が宮内省に出で、宮内卿に逢はせて詠みしる歌なり



侯ハ舊廣島藩主なり安
 政五年石見守に任り元
 治に左近衛少將に進む
 後ち維新の偉業を補翼
 し御剣一刀永世禄一萬五
 千石を賜ハる明治二年參
 與に任ト又權中納言と
 なる同十三年元老院議
 官に任ト同十五年伊國
 特命全權公使となり同
 十七年華族局長官に任
 ト又正二位勲一等に叙
 せらる爰に記すハ雪中
 早梅といふ題の哥なり



君の家ハ代々名家の尊稱
 あり君父を周司と稱し
 儒雅碩学を以て名あり
 君の漢籍に還しき所以
 ハ實に其父を素とする
 に由る又其法律の師と
 せし人ハ其作河津矢代
 大井等の諸大家とす故
 小君の法律に通達して
 能く訴機を回らすに巧
 みなるも亦宜なりと謂
 つべし今爰に掲る哥ハ
 君か静の舞を奏づる図
 をみて詠するものなり



静かなる舞を奏する
 東海

板倉中
 君の

侯ハ前兵部大輔慶前氏の
 次男にして明治の始め中
 將慶順氏の家督を相續し
 後三位に叙せらる同十
 三年勲三等に叙せられ
 後ち爵香間祇候と仰せ付
 らる同十六年侯爵を授
 かり後ち正三位に進む今
 茲に載るハ按ずるに新
 年の風景を詠たる歌より
 んか



細川護久
 西三位勲三等侯爵

高寺法院

君ハ三春藩士にして慶應の末勲王の大義を唱へ固く佐幕の意見に排け王師を助け八偏に君の
 先見遠識に由り明治六年福島縣官に任じ幾たび辭職して板垣伯と愛国社を創設す同十四年。



法院に於て禁錮七年マム

縣會議
 長に挙げられ
 後ち国事犯
 を企て高寺

河井廣中
 思ひ詠く

君ハ伊勢国度會郡城田村の人にして慶應義塾の出身なり明治九年郵便報知新聞記者となりオホ華の稱を博し後ち大隈伯の推舉に依て大蔵権少書記官に任し正七位に叙せらる掛冠の後又大隈伯と改進黨を組織し次て朝野新聞記者となり同廿一年政況視察の爲め欧米諸邦に航游す此詩題ハ蒙三年退去之嚴命遂赴海外臨發有作こあり



優游只應伴
烟窗
孤客
三季不憶家
萬里江山何
處好
夢魂飛去處
佛
寄行旅

男ハ舊山口藩士にして夙に國事に奔走し維新の偉業を翼賛して功勲あり明治元年議政官に出仕し翌年京都府大參事に任じ次て知事に昇進し又元老院議官に陞る同廿年男爵を授かり翌年法律取調委員となり同廿三年行政裁判所長官に任し現時從三位勲一等たり今爰に記す和哥ハ君ハ我國体の貴きことを詠たるなり



從三位勲二等男爵
梅村正直
神皇正統記
萬葉集
和歌

公ハ文久三年六月京都に生
る先考ハ田公卿より明治の
始め洋行して英仏獨伊四
ヶ國に留学して政治法律
經濟學等の深遠を極め同
十二年歸朝一正四位に叙せ
らる同十七年公爵を授かる
天資俊邁卓犖にして群衆
に超越するハ既に伊藤伯り
特に公を指名して議長を代
理せしめたるに由て之を知
るべきなり此歌ハ曙に云ふ
題にて詠みたるものなり



君ハ佐賀縣の人なり嘗て陸
軍省の特命を受け仏國に留
學し軍事を學び其餘暇を以て
政治法律等を學び歸朝す當
時政府ハ頻りに君を要路に奉
んとせしむ之を辭して應ぜ
ず云ふ後長崎縣會議長と
なり又衆議院開會正副議長
を撰舉せし時の如きハ君
其三名の候補者中に奉ら
る以て君の人傑なるを知
るべきなり此処に記す
哥ハ水曾義仲のことを詠
しものなり



君ハ伊豫に生れ幼にして
 学を好み青年にして諸史
 に通曉せり明治五年神山
 縣属官に任じ後ち大蔵省
 に出仕せしも幾もなく之を
 辞し朝野新聞記者となり
 諛謗律に觸て獄に繋かる
 蓋し君の今日英書に還し
 きハ此在獄中に攻究したる
 ものなりと云ふ同廿一年
 欧米に航海し政況を視察
 して歸朝す此詩ハ友人の
 文稿の後に書くと題せり



同窓舊友
 散如雲杯酒
 何時再會君
 半夜小樓風雨暗
 剪燈獨讀故
 人文

末廣重恭

君ハ嘗て安積良齋の門に入
 り漢学を修め後ち仏蘭二
 学を攻習し慶應元年佛國
 に渡航し政治法律等の
 學術を修め明治元年歸朝
 し政府に入る其間文部司法
 兩省及太政官等の書記官を
 歴任し又元老院議官に進
 み東京学士會院に出て司
 法次官に任ず現時從三位
 勲一等法律博士たり茲に
 掲る歌ハ蓋し披書述懷の
 題にて詠たるものなりとん



從三位勲一等
 法律博士
 著作權
 終り

終り

侯ハ舊德島藩主なり明治
 維新以前ハ淡路守中將た
 リ明治二年藩知事に任ド
 後ち参事院議官に任ド役
 二位勲三等に叙せらる同
 十六年仏國特命全權公使
 小進み同廿三年東京府知
 事に轉ト大に府政の面目
 を改良す而して其貴族
 院に出つるや投票多數
 を以て請願委員長に當
 撰一翌年議長に勅任す



君ハ舊土佐藩士にして明治
 七年神奈川縣令に任せられ
 同九年元老院議官に榮轉一
 後四位に叙せらる同十三年
 本官を辞して野に退く時よ
 関西の人士立憲政黨を組織
 一君其総理に舉らる後ち衆
 議院初開の日投票最多數に
 依て議長に當撰す亦以て君
 か器量の全院に重きを致す
 を知るに足れり今此下掲
 くる一首ハ寫真をみて詠み
 たるうたなり



殿下ハ一品職仁親王の御子天保六年の御誕生なり幕府の末路に當リ大に王
 事に御勤勞あらせられ明治四年福岡縣知事に任じ後元老院議長に任じ左
 大臣に陞り陸軍大將に進み西南の役に征討大總督の命を奉りて賊徒を討治
 大勲位に叙せられ今や參謀總長の榮地に在らせらる



深田正韶 大人著

小倉百首略解

大本美製全二冊
 正價金三拾五錢

泰西の語學を修め唐詩選の講釋を知ると雖も和歌百人一首の意義に通せざれば日本
 人にして日本人に非ずと云ふも決して過言にあらざるなり方今和文の學校科目に入る
 も豈偶然ならんや本書は簡易明瞭の解釋にして兒童も一讀の下に深意を曉り得べき良
 書なり

見田尚之 大人著

歌學集腋

小不全部四冊
 正價金三拾五錢

●卷一 古言梯 ●卷二 假字用格 詞のやちたま ひもかがみ
 ●第三 詞の玉の緒 ●卷四 冠辭例 永言寫式 永言寫式
 此書はかなづかひ大全とも謂ふ可き者にして和歌の初學には至便の書なり

發兌書舖

名古屋本町通
 鍛冶町二丁目

三輪文次郎

經濟 通俗
入 繪

日用家事要法

男女必讀
有益寶典

●訂正増補三版
●洋裝美製本
●凡三百ペー
●實價參拾錢
●郵稅八錢

[illegible]

内務省衛生局技師 後藤新平先生題辭
熊澤鈺七郎先生著

通俗衛生新書

全一冊

正價 廿五 錢

郵税 四 錢

衛生とは生命を完然に保続するの法にして人間の生活上須臾も忽にすべからざる者也
諺に曰ふ命有ての物種と信なる哉言や衛生を勉めずんば何を以てう能く事業を成して
目的を達し長壽を保ちて快樂を享くるを得ん衛生を以て經濟の根源と爲すも亦宜なる
哉近時衛生の書世に刊行する者少なからず然れども多くは高尚に過ぎ或は學理を知ら
ざる者の手に成れる無稽の説を集めし冊子のみにして未だ通俗適度の好書を見ぞ熊澤
先生之を憂ひ文章の平易と記事の簡明とを旨とし懇切丁寧本書を編述し加ふるに細密
なる數葉の圖書を以てせらる蓋し先生の意普く世人をして衛生の必要を知しめんと欲
するに在り四方の諸彦速に購讀して宜しく疾病を未萌に防ぎ健康と天壽とを保つべし

名古屋市本町通鐵砲町二丁目

出版書肆

美濃屋
靜觀堂

三輪文次郎

宮戸松齋先生著

尾張名所圖繪

洋綴袖珍美本 正價 參拾錢
凡百廿ページ 郵税 四 錢
銅鐫鮮明密書

尾張は日本の中央に位し土地平坦にして氣候溫和固より豐饒の國也製造物産頗る多し
名所舊跡豈に乏しからんや曩に尾張名所前後十三冊の大成したる者あり而して今又本
書を新刻する重複に似たれども決して然らず曩の尾張名所は舊時の名所にして今此尾
張名所は開明の今日實地と毫も異ならざる所を精選し一小冊子にして其著名なる者悉
く網羅したれば多冊と要せずして之と知るに充分なり又挿畫の如きは寫眞を其儘摸擬
し良工之を刻したれば其緻密鮮明なる恐くは比類無けん製本亦堅牢にして且つ美麗な
り江湖の君子請ふ一本を購ひ其愛玩す可きを知り賜はんことを

出版書肆

名古屋本町通
鐵砲町二丁目

靜觀堂 三輪文次郎

徳川公題辭

男雲韶 服部拱 市野靖

大久保誠知 藤井鑑 永田新次郎

牧山佐藤先生著

淺野三龍 石川素堂 辰巳守全校

南摩羽峰序

太田元道 村瀬緒 高橋磯八郎
石橋尙實 陸鉞巖

老子講義

全部六卷

半紙形製本

正價八拾錢

老子ハ支那哲學ニシテ諸子百家ノ祖タリ其八十一章五千言一トシ金言ナラザルハ無シ彼ノ●無名ハ天地ノ始有名ハ萬物ノ母●玄之又玄衆妙之門●天網恢々疎コシテ漏サズ●功遂ゲ身退クハ天ノ道●大道廢レテ仁義アリ●道ノ物タル惟レ恍惟レ惚惚タリ恍タリ其中ニ象アリ●颶風ハ朝チ終ヘス驟雨ハ日チ終ヘス●柔ハ剛ニ勝チ弱ハ強ニ勝ツ

●萬物ハ有ヨリ生シ有ハ無ヨリ生ズ●大巧ハ拙ナルガ如ク大辯ハ訥ナルカ如シ●其政察察タレハ其民缺缺●千里ノ行モ足下ニ始マル●得難キ貨チ貴バザレハ民チシテ盜チ爲サマラシム●終チ慎ム始ノ如クナレハ則チ敗事無シ●等ノ語ハ皆是レ老子ノ格言也而シテ老子ノ書タル其文簡約コシテ其意深遠古來學者ノ解シ難シトスル所以ナリ牧山佐藤先生ハ維新前尾張藩ノ侍講ニシテ明倫堂ノ督學タリシ鴻儒ナリ其老子ニ精シキヲハ普ク世人ノ知ル所ナリ余曩キニ先生ノ門ニ在リテ講義ヲ聽クヲ數回筆記シ得テ先生ニ請ヒ遂ニ出版シタル者凡ソ本書六卷ナリ抑茲編ノ體タル章意。節意。字訓。解義。ノ四欄ニ分チ之ニ附スルニ餘論チ以テシテ詳明精確看者チシテ一目瞭然タラシム古今未曾有ノ善解ナレバ凡ソ政治家。哲學家。法律家。經濟家。教育家。理學家。兵學家。雄辯家。文章家。等苟モ道チ以テ本トスル者ハ毎ニ座右ニ措テ熟讀スベキ寶典也

發兌書肆

美濃屋
靜觀堂

三輪文次郎

名古屋市本町通鐵砲町二丁目

●三條公題辭 ●清國 愈曲園先生叙
●大沼枕山巖谷一六諸先生評 ●門下有志者出版

牧山樓詩鈔

中本白紙摺 正價三拾錢
全部貳冊 郵稅六錢

牧山佐藤先生ハ今代儒流ノ泰斗ニシテ經術ノ餘詩文ニ巧ナルヲハ世人ノ徧ク知ル所ナリ然ルニ文ハ既ニ牧山樓文鈔アレバ詩鈔ニ至テハ未タ世ニ布カズ門下諸子之ヲ憾ミ今回先生ニ乞ヒ金ヲ醺シテ上木ス詩學ニ志アル人ハ一讀セテ其工妙ナルヲ知ルベシ

●牧山佐藤先生閱並序 ●菊池三溪先生序
●南摩羽峯先生序 ●服部富三郎先生著

唐宋八大家文讀本摘解

半紙本全四冊
正價金六拾錢

此書四冊ニシテ八家全備ス其引用スル所ノ書一百餘種險句艱字ノ解釋誤字衍文ノ校正至ラザル所ナシ加フルニ牧山先生ノ説ヲ以テシテ頗ル精詳ナ極ム八家文箋釋ノ書世ニ多シト雖モ未タ此書ニ過グル者アラズ江湖ノ君子一讀セテ其関ヲ可ラザルヲ知リ賜ヘ

發兌書肆

名古屋本町通 靜觀堂 三輪文次郎
鐵砲町二丁目

伊東運窓先生著

日本新編演說集

凡二百ページ
正價拾五錢
郵稅四錢

◎政治之部◎列座の議員ニ訴ふ。パトリック・ヘンリー◎憲法發布式に就て。黒田清隆◎府民諸君ニ告ぐ。ブランドー◎麹町區公民會に於て。楠本正隆◎大阪清華樓に於て東上の趣意を告ぐ。板垣退助◎父廟社第十回紀念大會に於て。後藤象次郎◎法律の部◎佛蘭西法律學校卒業生證書授與式。ゴアソナード◎法學士會の意見。増島六一郎◎監獄改良の意見。伊藤博文◎經濟の部◎我黨の勝利。ハリソン◎振出し手形の意見。富田鐵之助◎教育の部◎私立小學校組合に於て。櫻本武揚◎華族女學校始業式。下田歌子◎宗教の部◎佛教改革の意見。北島道福◎美術の部◎美術論。フエノロサ◎文學の部◎漢學工夫を論ず。中村正直◎速配術の來歴。源綱紀◎商業の部◎東京米商會所祝宴の席上に於て。中村道太◎九州八縣連合共進會宴會授與式。井上馨◎高等商業學校生徒卒業證書授與式に就て。藤澤榮一◎社會の部◎社會進化の大法。外山正一◎社會主義。和田垣壽三◎交詢社第十回紀念大會に於て。福澤諭吉◎日本國民の氣風。徳富猪一郎◎願讀の部◎アライト氏を吊す。クラットストン◎審判の部◎名古屋重罪裁判所に於て。大井憲太郎(以上二十六編)

録

目

出版書肆

名古屋本町通 靜觀堂 三輪文次郎
鐵砲町二丁目

本書は一世の智識を開拓して千古の英雄を壓倒するに足る可き價值ある中外諸大家の名論卓説を蒐集し一句一章毎に其法格を指示し又毎編總評と下し且つ證頭に偶評と附し以て演說初學の模範とす

中江篤介先生序
伊東洋二郎君著

雄辨
秘訣
實用演說法

全壹冊

實價十五錢

郵稅貳錢

本書は實際上より演説の極意に達し得るゝことを主眼として第一章總論。第二章言語の用法。第三章音聲の節調。第四章言語の體格。第五章論理法。第六章修辭法。第七章辨論の結構法。第八章章句段落法。第九章辨論五種の體裁。第十章態度。第十一章討論等の數章に分ちて叮嚀に其極意を細示し且つ其經としたる所は心理學。論理學。修辭華文學等にて又練とせし所は人々の情感と好尚とを以てしたれば何人たりとも本書に就て演説を講習する時は容易に出色の雄辯家老練の演説家と成ることを得べし

出版書肆

名古屋本町通
鐵砲町二丁目

靜觀堂 三輪文次郎

室鳩巢先生原著 ● 國枝老足先生補正

赤穂義人錄補正

大本全二冊

實價三拾五錢

郵稅六錢

當時鳩巢室翁義人ノ忠節ニ感激シテ其實跡ヲ搜索シ彝倫ノ大道ヲ傳ヘント欲シテ此錄ヲ著シ直ニ義人ヲ以テ標題ト爲セリ然レテ國枝翁ノ此錄ヲ欽慕シテ玩味スルノ既ニ年アリ錄中猶誤脱アルヲ惜ミ義人ノ手書等ニ據リ研究シテ補正ヲ加ヘ此編ヲ刊行セリ四方ノ君子細閱シテ其明確ナルヲ知リ賜ハンコヲ乞フ

度會弘琰先生著 ● 清客王鶴笙先生題籤

草書節要

唐紙摺全二冊

實價三拾五錢

郵稅八錢

此書ハ草字彙草書選ノ類ニシテ和漢歷代名家ノ草字ヲ廣ク古法帖ヨリ抄輯シテ之ヲ畫引體ニ編纂シ專ラ輕便ヲ旨トスル者ナレハ獨リ書家ノ必用ノミナラス苟クモ漢字ヲ學ブ人ハ机上一日モ欠ク可ラザル良書也

發兌書肆

名古屋本町通
鐵砲町二丁目

靜觀堂 三輪文次郎

蓮川

大醫花新發直意先生著

男女必携 毒鑑查法

附豫防法と治療法

全一冊
正價金六錢
郵税二錢

●此書は花新發直意氏が曩きに大坂府立驅癪院在職中多年自己の實驗に係る確實適切なるものを記載し敢て他人の付説を私みたるものに非ざ故に或は他説と表裏する處少しとせざる官幸に牽強附會の妄説に非らざることを諒せよ

一此書は刃圭家のために作らす俗人のために著すものなれば單簡平易を旨とし専ら俗語を用ひ勉て文飾を加へざる也

一第一に鑑察法を記し次に豫防法を擧げ終に治療法掲載す

發兌書肆

名古屋本町通 靜觀堂 三輪文次郎
鐵砲町二丁目

蓮川

昭和廿四年五月五日印刷
同日九月十三日出版

版權所有

名古屋市東區本町通
著作權 作東洋二
名古屋市東區本町通
發行所 三輪文次郎
名古屋市東區本町通
印刷所 中島大助

發賣所

名古屋市東區本町通

靜觀堂

010190509210

